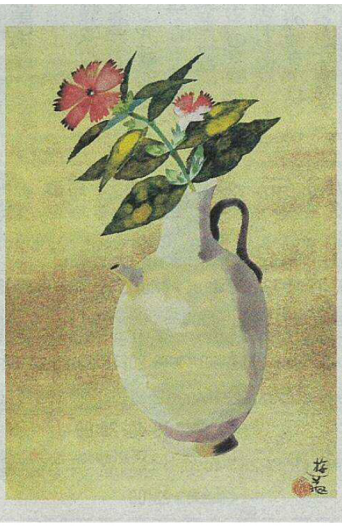

「岩菲と白い壺」

1985年ごろ、紙本彩色
45・9㌢×33・9㌢

小倉遊亀（1895～2000年）

白い壺（つぼ）に生けられたかれんな岩菲（がんぴ）の花です。花びらの赤、葉の黄緑と壺の白さが金地の空間のなかでバランスよく配置されています。単純な構図ですが、張りつめたような緊張感ではなく、ほどよく納まった小品といえます。

小倉遊亀という画家の作品を見ていくと、私見ながら1930年代以降の小林古径、安田靫彦、そして洋画家の安井曽太郎のよき後継者だったとおもいます。歴史画、肖像画、そして静物画において、彼らの良質な面をひき継ぎつつ、それでいて絵画の平面性と色彩を意識したマティスなどの近代絵画のモダニズムをも何とか取り入れようとしています。

しかも、いずれの作品も、またどんなに大胆なこころみをしようとも、決して気品が失われていないのです。その品とは、お高くとまったものではなく、だれでもが親しみをもてる温かな情感につつまれています。

（田中）

〈名画の扉〉

大川美術館企画展から